

地藏王



三三六号

野ごころ

丸岡 稔

昭和20年3月、私は旧制新発田中学校（現新発田高校）を卒業しています。戦争末期のこの年、4年を終えたばかりの私達は、5年生と一緒に卒業させられたのです。一人でも多く、早く戦場や軍需（ぐんじゅ）工場に送らせるためでした。私は直ぐ海軍に入り、そこで終戦。その後、旧制新潟高校を卒業して昭和24年に、医者を目指し仙台の東北大学医学部に入りました。土地柄、旧制第二高等学校卒が多く、屢々同級生や先輩から、「お前は新潟出身だけど、村上是近いのか、村上はどんな所か？」と訊かれました。それは私の母校、新発田中学の初代校長、三好愛吉先生が、後に仙台の第二高校の校長となり大きな足跡を遺されていたことを後で知りましたが、先生は村上市のご出身だったのです。中学時代の私は、登校、下校の際には必ず奉安殿と初代校長の銅像に敬礼していましたが、先生の間については何も聞かされていなかったのです、三好先生が仙台では今でもこのように尊敬されていることに驚き、同時に自分の不明を恥ずかしく思ったのです。医学部で7年先輩の石田名香雄という人がいます。上越市出身で、世界的なウィルス学者です。お名前は「名香山」とも言われる故郷の妙高山を忘れないようにとつけられたと聞きました。この先生が、後に東北大学総長に就任した時の訓示が

語り継がれています。主旨は、「校風の無い学校は学校とは言えない。自分は『仙台二校』の校長であった三好愛吉先生が、常々説いていた『野ごころ』をこの大学の校風にしたい」というものでした。石田先生は仙台二校卒業であったのです。

「野ごころ」漢字で書けば野心となり誤解されやすいですが、都会の文明や世俗に流されず、人間本来の性を培って行こう、と言う意味と、野心に通ずる大きな志を持つというものでした。

石田先生はすでに亡くなっていますが、多くの優秀な弟子を育てたことでも有名です。その一人、岩手県宮古市出身の沢崎義夫という私の同級生がいますが、学生時代は演劇部に所属し、自分で脚本を書いたり演出したり、時に俳優もやるという、美術部に入っていた私は、よく舞台装置を造らされたものでした。試験になると、「お前、勉強して来たんなら傍に坐らせてくれ」と言われるので、友人達は戦々恐々としたものです。後に石田先生の門下に入り、大きな仕事もし、中国で初のウィルス研究所の設立を指導し、沢山の中国留学生を受け入れています。「折角日本に来たのだから、勉強ばかりしないで日本の文化も学んで行ってくれ」と個人のお金で、京都、奈良に遊ばせたりしていました。晩年は夫婦でアフリカのザンビアに渡り、現地の医療を指導しています。彼も仙台二校出身で、正に野ごころで生きて来たと言えます。今も健在で、クラス会の幹事役を一人でやってくれています。

この8月3日（土）は、わが母校、新発田高校の同窓会がありました。ここ数年、旧制中学卒は私一人になりました。一番古い卒業

生がやらされる乾盃の音頭をとらされています。折角の機会なので、一言しゃべらせて貰っています。今年「野ごころ」について話しました。懇親会こんしんかいは別会場で、それに先立ち母校で総会があります。門を入ると昔と同じ場所に三好先生の胸像があります。今では毎年、深い想いをこめて頭を下げています。凜とした顔に秀れた教育者の志が表われています。

私が学んだ頃は戦争の真只中、校風と言えば質実剛健か、これならあの時代はこの学校も同じ、三好先生の希いなど埋もれてしまっていました。「今、この三好愛吉先生の祈りが校風に生かされていると嬉しいのですが」と言って乾盃の発声をしました。

懇親会の席は、現校長の隣りでした。先生は紙とペンを差し出し「ノゴコロ」はどう書くのですか？と言われました。そして「私は石田名香雄先生と同じ上越出身です。今年の春に着任したばかりで、初代校長の三好先生のことともよく知らないし、「野ごころ」という言葉も初めて聞きました。」と。私は、スピーチで三好先生のことを話して良かった。校長先生の隣りに席を設けてもらって良かったと思いました。そして「これから生徒達に三好先生のことを話して行きます。」と約束してくれました。

考えてみれば、我々の総集会で歌われる、創始者板垣先生作詩の「地ひびきの歌」は、正に「野ごころ」そのものではありませんか。

「若葦伸びよ 岸辺に伸びよ 荒き土 踏み分け行こう」

「豊かな流れ 源遠し あくがるる 彼方にいざ」